

教育支援（幸せの子どもの家）



プロジェクトの背景

ボルボット時代に家族を失った経験を持つソカ氏の孤児院設立の構想に対して、2002年に当会が施設を建設し、創設に携わった。贈呈式は2002年11月30日。主にゴミ山で生活している孤児等を調査面接し、就学意欲のある16名の支援から開始した。CCHはCenter for Children's Happinessの略称。日本語では「幸せの子どもの家」と呼ぶ。カンボジアのNGOとして正式に登録されている団体で、設立当初からソカ氏が所長を務める。これまでに在籍した子どもの数は215名。2014年4月末現在、90名の子どもが生活している。また、CCH内で運営されている小学校にはCCH内の子ども38名の他に外部の子ども100名を受け入れている。

インタビュー

『教育だけが人々の人生を変えることができることに気がしました。』

CCH所長(理事) Mech Sokha



教育は人生を成功に導くために非常に大切です。

不幸なことに、カンボジアは1970年頃から、内乱状態になってしまいました。1970年から1975年の間に、クメール・ルージュとロンノル軍の間で戦争があり、僻地や田舎の学校は閉鎖され、都市の学校だけが、授業を受けることができました。しかし、その都市の学校でさえ、たびたび閉鎖されることがありました。ロンノル軍に対するデモはますます激しくなり、クメール・ルージュがカンボジアを1975年4月17日に制圧するまで続きました。人々はクメール・ルージュの兵士を歓迎しましたが、クメール・ルージュの兵士が「あなた方全員は、一週間僻地や田舎へ行きなさい」と命令したとき、人々の歓喜は消えました。さらに悪いことに、クメール・ルージュは、学校やマーケットや職場を閉鎖し、180万人以上の人々を殺戮しました。

1979年1月に、カンボジア軍とベトナム軍が、クメール・ルージュからカンボジア国民を解放しました。国内の各州からプノンペンに歩いて戻った人もいました。学校は再開され、クメール・ルージュ時代に学校へ行けなかった生徒も戻って来ました。教育が、すべてのカンボジア人の子どもに行き渡るようになりました。長年の経験に基づき、よい教育を受けること、つまり、教育だけが人々の人生を変えることができることに気がしました。

2002年には、小山内美江子氏とJHPの支援で、CCHを設立しました。CCHは、孤児や貧しい子どもを支援するために教育、医療、保護施設、食料、文化交流プログラムを提供してきました。CCHの使命と目標は、子どもたちの将来のために良い教育を受けさせて、子どもたちの人生を発展させることにあります。

小学校では、子どもたちは、読み、書き、そろばんを習得する必要があります。小学生で知識やマナーを身に付けさせることは、中学生に成長した時への良い教育投資となり、経験を積ませることもなります。さらに、子どもたちが成人したときに、より明るい未来のための変革にもなります。

CCH内の小学校は、月曜日から金曜日まで毎日4時間、クメール語、算数、社会や理科などの一般的な教養を教えています。また、月曜日から土曜日まで毎日4時間、生活上のスキル、社会的スキル、スポーツ、音楽や絵画を教えています。CCH小学校は、CCHの子どもたち、およびCCHの近くに住んでいる恵まれない子どもたちへ教育支援をおこなっています。授業料は無料で、制服や教材も提供しています。おかげさまで、生徒すべてが良い点を取り、知識、技能、マナーなどの点で十分な教育を受けています。ですから、教育は、より良い生活へと導くための重要な方向性を与えます。

私は、CCHにご協力をいただいているすべての日本人支援者に、特に私の素晴らしい日本のお母さんである小山内美江子JHP代表に感謝の意を表します。



CCH内の小学校で学ぶ子どもたち



技能の習得を目指す若者たち



農村で開催するロードショー

項目	総数	男子	女子
小学生	39	17	22
中学生	51	25	26
小計	90	42	48
(CCH現在数)			
CCHサポートの プノンペン市内大学生	6	1	5
自立している 高校生、大学生	44	20	24
社会人 (CCH卒業生)	68	50	18
海外のインターナショナル スクール在籍者	7	3	4
支援総数	215	116	98

ボランティア派遣

プロジェクトの背景

JHP設立以前の1991年に、小山内代表が湾岸戦争後のイランのクルド難民救援に参加。ここで初めて大学生と活動を共にし、その成長する姿を見たことがきっかけとなり、地球的視野を持つ若者を育成する事業を開始。これまで、海外は、カンボジア、旧ユーゴ、アフリカ、インド、ボスニアなど、国内は、阪神淡路大震災、日本海重油災害、中越地震、三宅島帰島、東日本大震災などの救援活動にボランティアを派遣している。



子ども達と力を合わせて作業を行う大学生参加者



アフリカへ毛布をおくる運動

JHPはアフリカへ毛布をおくる運動推進委員会の構成団体として活動しています。この活動では、30年間にアフリカ22カ国に400万枚以上の毛布を送っています。

2013年度は、JHPから2名のスタッフを派遣し毛布配布とモニタリングに携わりました。同委員会に今年度寄せられた毛布26,735枚、海外輸送協力金約28,688,075円は、2014年度以降の活動に役立てられます。



一枚の毛布が届いたとき
そっと心が
つながる

参加者の感想

活動中、どの地域でも人々の心の豊かさを感じました。オルッセイ小学校で現地の人々と共に作業をしたことは一生忘れません。一方で、都市と郊外の圧倒的な経済格差、衛生問題など多くの問題も目の当たりにしました。支援とは、相手の良い所も悪い所も知り自分にできる範囲で手を差し伸べること。難しいことではないと学びました。(2014年3月隊 照井美聖)

支援活動の第一歩は、現地の方々を助けるというよりはむしろ、彼らの暮らしを自らの五感で感じ取るのだと思います。彼らの日常を自分の目で確かめ、顔を合わせ言葉を交わし、縁を創る。支援の入口は人との繋がりであり、「支援」ではなく縁を支える「支縁」の姿勢が求められることを痛感しました。(2014年3月隊 齋藤寛史)

カンボジアボランティア隊

今年度は、8月隊(2013年8月3～27日)10名、3月隊(2014年3月3日～3月18日)14名を派遣しました。8月隊は、コンボンチャム州、スワイリエン州の小学校、3月隊は、コンボンチャム州にてそれぞれ遊具(ブランコ)建設に汗を流しました。その他、学校贈呈式参加、JHPプロジェクト見学、NGO見学等を行いました。



ブランコの部品となる木材に防腐剤を塗装



小学校でのブランコ建設



贈呈式でソーラン節を披露